

被災地での経験を仲間と共有しよう

ひの たつや
日野 達弥

●NTT労働組合中央本部・企画組織部長

6月18日、大阪北部を震度6弱の地震が襲い、7月6～8日には、「数十年に一度の大雨」と言われるほどの大量の雨が降った。この雨は、「平成30年7月豪雨」と呼ばれ、多くの地域で24時間、48時間、72時間雨量の観測史上最高値を更新した。西日本各地で河川の氾濫や浸水害、土砂災害が発生し、死者・行方不明者230名、全・半壊家屋10,000戸超など、多くの尊い命と貴重な財産が奪われた。犠牲になられた方々にお悔やみとすべての被災された方々にお見舞い申し上げたい。今なお多くの方々が普段の生活を取り戻すことができず、不自由な生活を余儀なくされており、一日も早い復旧・復興を祈るばかりだ。

今年の夏は、連日各地で観測史上最高気温を記録し、7月の平均気温は全国各地で例年を上回るなど、まさに「酷暑」が続き、「異常気象」とされている。報道では、さまざまな暑さ対策など注意喚起などがしきりに行なわれているが、連日「熱中症」による死亡者の報告が後を絶たない。この暑さの直接的原因は、「ダブル高気圧」、それをもたらす原因はそもそも何なのか…と考えてしまうが、これもまた「災害」と言えそうな状況にある。こうした自然災害への備えにあたっては、「過去の教訓を生かす」ことは非常に重要なことだが、災害は真夜中に起きるかもしれないし、いつどこで発生するかも分からない。さらに、どんな災害をもたらすのか予見し難いものであって、誤解を恐れずに言えば万全に対応する（できる）というのは無理だろう。ならば、災害発生時にどう対応すればいいのだろうか。できることは、必要な行動や最低限の非常備品を用意するなどの知識

を頭の片隅にでも常に保有しておくことではないか。もはや当たり前と言われるような話だが、日頃からの防災訓練や防災研修は、万が一の時に冷静な初動判断と二次災害防止に対応できるとされ、非常に有効であることを改めて肝に銘じたい。あわせて防災訓練や防災研修は、絶対に「無駄なコスト・稼働」ではなく、自分や家族、仲間の命を守るためには欠かすことのできない「絶対に必要なこと」として再確認しておく必要があるだろう。危機管理は不可能でも危機対応は不可能ではないということ。これは、安全労働にも言えることで、事故事例を共有し、大切な教訓として生かすこと、防災演習を日頃から繰り返し実行することで、安全に関する「知識」と「意識」と「行動」が身につく、職場の仲間の命をも守ることにつながることは、過去の多くの事例で実証済みである。

7月末に、連合岡山・情報労連の要請に基づき真備町にボランティアに行かせていただき、個人参加やさまざまな団体から派遣された多くのボランティアと一緒に復旧支援に参加してきた。豪雨被災地では、まだまだ手つかず状態（8月上旬時点）の地域もあるという。多くのボランティアの人たちが現地に入り、復旧作業等の支援活動を通じながら、被災された方々や現地の連合加盟組織の皆さんと対話することもあるのだろう。ぜひ、「見て」「聞いて」「感じた」ことを自組織内で伝えたり、これからの取り組みや教訓などに生かしていただきたい。私たち一人ひとりの力は、自然災害の前では無力かもしれないが、それでも多くの経験から学んだこと、それを仲間と共有することは、防災への第一歩と信じている。